

# 本よみり堂



■「サーカスは私のへ大学」だった

## 大島 幹雄さん

勉強し直した。

次第に言葉も通じるようになり、3か月もたつと、

「1日として同じことが起

「私のロシア語の先生はクマでした」と道化師のようにおどけて笑つた。

早大でロシア文学を専攻し、研究者になろうと大学院を受験したが失敗。浪人中の1979

年、生活費を稼ぐため海外の芸能団体を招くイベント会社に入った。

入社するなり、来日した旧ソ連のサーカス団の雑用、特にクマのエサの手配を任された。マルコフ(ニンジン)、フレープ(パン)、カプ

ースタ(キャベツ)……。文章は読めても全くしゃべれなかった元学生は、必死になってロシア語の発音を

きない、生き物のようなサーカスの魅力に取りつかれた」。やがて大学院のことは忘れ、気づけばサーカスのプロデューサーになっていた。

## 地球市民の芸人たち

### 著者来店

海外の有望な芸人を見つけ、日本に呼ぶ仕事を通じて、これまでに約30か国を渡り歩いた。インドの幻の芸「インディアンロープ」の使い手

や、韓国の人間国宝になった綱渡り師、日本の桃太郎の物語をショーに仕立てたロシア人マジシャンなど、卓越した芸の持ち主との交友をつづけた。「みんな自由に国境を越え、体一つを資本に人を喜ばせているコスモポリタン(地球市民)。そんな彼らの生き方にあこがれます」

タイトルのへ大学は学びの場であるとともに「出会いの場」だったと思っている。「サーカスに携わりことで知らなかった世界、魅力的な人物にいっぱい巡りあえましたから」そして、何よりこの大学に入って得られたのは、舞台を見て喜んでくれる観客の笑顔。「今年還暦ですが、卒業はまだまだ先でしょうね」(こぶし書房、1800円) 森重達裕